

## 音読

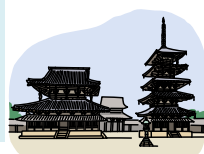
短歌のリズムと言葉を味わおう  
短歌音読プリントの学習の手引き

年

名前

## 短歌の音読と暗唱の手引き

音読で、短歌に親しみましょう



**短歌**（たんか）とは、日本で古くからうたわれてきた和歌の一つです。**五・七・五・七・七の三十一音**から成ります。自然の風景をよんだり、事実をありのままよんだり、気持ちをよんだりしています。短歌がもつリズムを感じ取ったり、情景を思い浮かべたりしながら読みましょう。

短歌の特ちょうを知り、情景を思い浮かべて、音読に生かしましょう。

### 形式

・五・七・五（上の句）、七・七（下の句）三十一音のリズムで成り立ちます。

第一句

第二句

第三句

第四句

第五句

**秋来ぬと**

**目にはさやかに**

**見えねども**

**風の音にぞ**

**おどろかれぬる**

（藤原敏行）

・字余り、字足らず

三十一音より多くなることを字余り、少なくなることを字足らずと言います。

**表現の工夫**・・・短い字数で表現するための様々な工夫が見られます。主なものを紹介します。

### 比喩や倒置法

金色の

ちひさき鳥の

かたちして

銀杏ちるなり

夕日の岡に

（与謝野晶子）

・**比喩（ひゆ）**

・・・たとえてうたうことで、生き生きと実感させる効果があります。

夕日に照らされて銀杏の葉が散ってゆく様子を、金色をした小さな鳥にたとえています。

・**倒置法（とうちほう）**

・・・言葉の順序を逆にすることで、意味を強める効果があります。

「夕日の岡に銀杏散るなり」を「銀杏散るなり夕日の岡に」とし、意味を強めています。

### 句のとめ方や枕詞

天の原

ふりさけ見れば

春日なる

三笠の山に

出でし月かも

（阿倍仲麻呂）

・「かも」でとめることで、月をみて故郷をなつかしむ気持ちを強く表しています。

ほかにも、「けり」「かな」などでとめることがあります。

春過ぎて

夏来にけらし

白妙の

衣干すてふ

天の香具山

（持統天皇）

・**枕詞（まくらことば）**

・・・ある特定の言葉を修飾し、短歌の調子を整え、気分をそえます。

「白妙の」は「衣」にかかる枕詞で、言葉の調子を整えています。

・**体言止め**

・・・しみじみとした味わいが出るように、第五句を名詞でとめた表現

右の歌は、第五句を「天の香具山」でとめています。

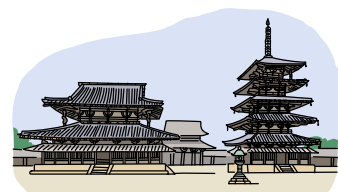
※ 短歌の暗唱に挑戦したり、短歌の大まかな内容を言ったりしましょう。

# 音読

短歌のリズムを感じ取りながら  
音読や暗唱をしましょう①

年  
名前

短歌1（奈良時代） 短歌（たんか）とは五・七・五・七・七の三十一音から成るものです。短歌は、短歌1で音読するのは、奈良時代に作られた短歌です。情景や、歌にこめた思いなどを思いうかべたり、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。



春過ぎて 夏来にけらし 白妙の

ころもほ

ちよう

あま

かぐやま

衣干すてふ

天の香具山

（持統天皇）

いつの間にか春はすぎた。いよいよ夏がやって来たらしい。夏になると真っ白な衣を干すといわれる天の香具山に、白い衣が干してあるのが見えるとそう思う。

あま 天の原 ふりさけ見れば 春日なる かすが

みかさ

三笠の山に

出でし月かも

（阿倍仲麻呂）

広い空をはるかに見上げると、今ちょうど、月が出ている。あの月は、ふるさとの春日の山々の一つ、三笠の山の上で見たなつかしい月と同じなのだなあ。

たご うら 田子の浦に うち出でて見れば 白妙の 富士の たかね

たかね

高嶺に

雪は降りつつ

（山部赤人）

田子の浦に出て、はるか遠くをふと見上げると、富士の高いみねには、見事に真っ白な雪がふり積もっていることよ。

ひんがし 東の 野にかぎろひの 立つ見えて

え

かへり見すれば

月かたぶきぬ

（柿本人麻呂）

東の方の野は、朝日で、あかね色の光でそまっているのが見え、西の方をふり返って見ると、月がしずもうとしているのが見える。

| 読んだ回数<br>(○で囲む) |    |
|-----------------|----|
| 11              | 1  |
| 12              | 2  |
| 13              | 3  |
| 14              | 4  |
| 15              | 5  |
| 16              | 6  |
| 17              | 7  |
| 18              | 8  |
| 19              | 9  |
| 20              | 10 |

| 先生の評価<br>(◎・○・△) | 私の評価<br>(◎・○・△) | よい姿勢 | すらすら読む | 短歌の暗唱 | 意味が言える |
|------------------|-----------------|------|--------|-------|--------|
| ◎                | ◎               |      |        |       |        |
| ○                | ○               |      |        |       |        |
| △                | △               |      |        |       |        |

◎ とてもよい ○ よい △ もう少し

# 音読

短歌のリズムを感じ取りながら  
音読や暗唱をしましょう②

年

名前

短歌2（平安時代～江戸時代）

短歌2で音読するのは、平安時代から江戸時代に

作られた短歌です。情景や、歌にこめた思いなどを思いうかべたり、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども

風の音にぞ おどろかれぬる （藤原俊行）

秋がやってきたと、目にはまだはつきりとは見えないけれども、ふと耳にした風の音に、秋が来たことに、ふいに気づかされる。（平安時代によまれた歌）

ひさかたの 光のどけき 春の日に

しづ心なく 花の散るらむ （紀友則）

日の光がやわらかく、のどかな春の日であるというのに、どうして桜の花は、こんなにも落ち着かずに散っていくのだろうか。（平安時代によまれた歌）

大海の 磯もとどろに 寄する波

割れてくだけて さけて散るかも （源実朝）

大海の岩の多い海岸に、すさまじいきおいで波が打ち寄せている。はげしく岩にぶつかり、われて大きな音を出し、くだけ散っている。（鎌倉時代によまれた歌）

しきしまの やまと心を 人とはば

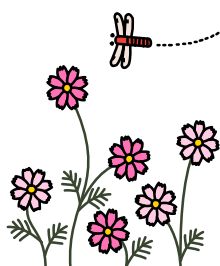
朝日にほふ 山ざくら花 （本居宣長）

やまと心とはどういうものかと、人がたずねたならば、それは、朝日に美しく光りがやく、山桜の花のようなものであると答えよう。（江戸時代によまれた歌）

| 読んだ回数<br>(○で囲む) |    |
|-----------------|----|
| 11              | 1  |
| 12              | 2  |
| 13              | 3  |
| 14              | 4  |
| 15              | 5  |
| 16              | 6  |
| 17              | 7  |
| 18              | 8  |
| 19              | 9  |
| 20              | 10 |

|               |      |        |       |        |
|---------------|------|--------|-------|--------|
|               | よい姿勢 | すらすら読む | 短歌の暗唱 | 意味が言える |
| 私の評価 (◎・○・△)  |      |        |       |        |
| 先生の評価 (◎・○・△) |      |        |       |        |

◎ とてもよい ○ よい △ もう少し



# 音読

短歌のリズムを感じ取りながら  
音読や暗唱をしましょう③

年

名前

## 短歌3（明治時代以降）

短歌3で音読するのは、明治時代以降に作られた短歌です。情景や、歌に込めた思いなどを思い浮かべたり、リズムを感じ取ったりしながら読みましょう。

金色の ちひさき鳥の かたちして

銀杏ちるなり 夕日の岡に （与謝野晶子）

秋の夕日に照らされた、丘の上のイチョウの木から、まるで金色をした小さな鳥が舞うように、葉がはらはりと散ってゆく。



白鳥は かなしからずや 空の青

海のをにも 染まらずただよふ （若山牧水）

白鳥は、ひとりで悲しくはないのだろうか。空の青さにも海の青さにもとけ合うことなく、その白いすがたのままただよっている。

東海の 小島の磯の 白砂に

われ泣きぬれて 蟹とたわむる （石川啄木）

東の方の小島の海岸で、さまざまなことが頭にうかび、悲しみになみだを流しながら、私にかにとたわむれている。

たらちねの 母がつりたる 青蚊帳を

すがしといねつ たるみたれども （長塚節）

久しぶりにふるさとへ帰った夜のこと、母が私のためにと青がやをつつて、ねどこを用意してくれた。少したるんでいたけれど、すがすがしい思いでねむることができた。

| 読んだ回数<br>(○で囲む) |    |
|-----------------|----|
| 11              | 1  |
| 12              | 2  |
| 13              | 3  |
| 14              | 4  |
| 15              | 5  |
| 16              | 6  |
| 17              | 7  |
| 18              | 8  |
| 19              | 9  |
| 20              | 10 |

|               |              |       |        |       |        |
|---------------|--------------|-------|--------|-------|--------|
| 先生の評価 (◎・○・△) | 私の評価 (◎・○・△) | よい姿勢、 | すらすら読む | 短歌の暗唱 | 意味が言える |
|---------------|--------------|-------|--------|-------|--------|

◎ とてもよい ○ よい △ もう少し